

**D14a Seasonal variation(?) in the near-IR color of Centaurs object 5145
Pholus**

高遠徳尚 (国立天文台)、Aurelie Bellucci(Ecole Normale Superieure/国立天文台)、寺田宏
(国立天文台)、すばる AO/IRCS グループ

(5145) Pholus は、太陽から 8.7 AU - 31.8 AU の距離を周期 9.2 年で公転している、離心率の比較的大きなケンタウルス族小惑星である。これまでの観測から、直径は約 185 km、可視から近赤外域にかけてのスペクトルが、太陽系天体の中で最も赤い天体の一つとして知られてきた。近赤外線スペクトルには波長 2 μ m の氷の吸収のほかに、2.27 μ m に氷と同程度の深さの吸収が観測されており、Cruikshank et al. (1998) はメタノール氷による吸収としている。また同じケンタウルス族の (2060) Chiron と違い、1992 年の発見以来彗星活動は観測されていない。

我々は 2001 年に J,H,K バンド、2002 年に V,R,I,J,H,K バンドで測光観測を、すばる望遠鏡 + IRCS/FOCAS で行った。その結果、これまでの観測 (1992 年から 1997 年) と比べて、近赤外域でカラーが変化していることがわかった。カラーは自転と共に変化するが、それ以外に長期にわたって変化している。本講演では、その原因について議論する。